

別紙 4

報告番号

※ 甲 第 号

主 論 文 の 要 旨

論文題目

Glimpses Across the “Garden of Battle”: Three Case Studies of Japanese War Haiku from the Second Sino-Japanese War (1937-1945)

(「いくさの庭」を眺め：日中戦争(1937-1945)における日本の戦争俳句の3つの事例研究)

氏名 GUTIERREZ CERVANTES Lenin Emmanuel

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、第二次日中戦争（1937-1945年）前半に日本軍兵士、銃後の俳人、女流俳人による俳句を120首以上取り上げて、検閲とプロパガンダの影響で戦時俳句の主題・作風・内容がどのように変遷したかを文学的分析を通して考察する。また戦時の文学史に位置付けて『ホトトギス』、『俳句研究』などの俳句雑誌に掲載された俳論・評論を基に当時の俳句がどのように評価されたかを明らかにする。長谷川素逝（1907-1946）のように、日本軍兵士が戦時俳句の理想像として唱えられる中で、多くの銃後の俳人、女流俳人が如何に対応し、自らのアイデンティティを俳句を通して表現したかについて検討する。

第1章では、日野葦平（1907-1960）が1938年8月に出版した小説『麦と兵隊』の俳句化の評価について論じています。俳句化は銃後にいた3人の俳人によって作られた。この俳句化は戦時中の俳句の表現の限界を示し、銃後で作られた戦争俳句におけるリアリズムと信憑性についての論争を引き起こしました。

第2章は、1939年に戦前にいた長谷川素逝が執筆した句集『砲車』に収められた俳句の出版史の解析です。この章では、素逝の中国での軍事行動と、彼の俳句に対する評価に焦点を当てています。また、俳句や作者の手紙の出版史にも触れ、素逝が戦争をどう描写し、どのように自身を兵士詩人として表現したかを明らかにしてい

ます。

第3章は、銃後で活躍した戦時期の日本の女性俳人によって作られた戦争俳句についての研究であり、これらの女性俳人が自身の俳句において戦時期の日本の女性像をどのように構築したかについて調査しています。女性俳人によって作られた銃後俳句は、戦時中に女性が直面した現実を描き、プロパガンダを通じて女性国民に向けられたいくつかの思想を反映しています。